

---

# 同窓会

石屋秀晴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

同窓会

### 【Nコード】

N0251H

### 【作者名】

石屋秀晴

### 【あらすじ】

若くして、経済的には何不自由ない地位を築き得た沙和子と竜男、そして『僕』の三人。頻繁に『同窓会』を開き、睦まじく交流を重ねる彼らの、秘められた過去と因縁とは？ クトゥルー神話ものです。

学生時代の友人と会うことを指して同窓会と言うなら、今日の同窓会が自身にとって何回めのものとなるのか、僕にはもはや分からない。大学での同期の三人、沙和子と竜男と僕は卒業以来、三か月と空けずに集まっては、食事会と称したじゃれあいをもう五年も継続している。

共通の友人たちには、特にそのことを隠しても、吹聴してもいい。だがもし知られてもきつと、やっぱり三人には特別な絆があるんだね、というようなことを言われるだけだと思う。大学四年のとき、僕ら三人は揃って、スキー場のある雪山で遭難した。そんな経験を共にしたのだからということで、皆納得するのだ。

「ごめん、遅れた。」

二人が待つテーブルの横で口にした、毎回言っているような気がする僕のセリフ。それを竜男はいつものように快く受け入れてくれたが、沙和子はいつものごとくに噛みついてきた。

「おつ、そい！」

先に飲み始めていたワインでとろんとした目をしながら、沙和子は努めて怒ってみせる。彼女はほとんどメイクをしないが、外見的にはどう見てもそこらを歩く女の子と変わらない。そんな彼女が実は年商五十億を売り上げる服飾メーカー『リボン&ジッパ』の社長兼メインデザイナーであるなんて、たぶん誰も信じないだろう。

リボンサイドとジッパサイドという大まかな系統はあるものの、女性用・男性用という明確な区分けをしないという商品展開で、彼女は話題を作った。彼女の店の客たちは、男も女も、店内の全ての商品を一度は見る。おかげでファッションの幅が広がったと言っている。喜んでくれるのだと、沙和子はとても嬉しそうに以前言っていた。

「リーマンなんか辞めて、起業しちやえばいいのに。ねえ。」

そう言つて沙和子は、社長仲間でもある竜男に話を振つた。

竜男の会社の売りは、自身で経営しているこの焼肉店でも採用されている、革新的な空調技術だ。それは煙等の発生源から排気ダクトまで、小規模の安定した竜巻状の気流を常に形成するというもので、おかげで店内には煙などなく、匂いも服につくほどではない。テーブルの上で揺らめく白い煙の竜巻から、『トルネード焼肉の店』などと呼ばれ人気だが、都内に数軒ある焼肉店の売り上げだけではたぶん、業態的には氷山のほんの一角だ。喫煙所やレストランや病院や工場から一般家庭まで、多くの場所で、今や竜男の技術は広く取り入れられている。

「でもまあそれはさ、個人の好きずきだから。」

竜男はやんわりと沙和子に返してから、僕に視線をよこした。

「俺なんかはたまに、サラリーマンやつてるお前がうらやましくなるよ。」

「それ、嫌みつて言うんだぜ。」

「本当だつて！」

「いいから、ご飯にしよ、ご飯！」

娘三人集えば喧しいとよく言うが、それは男女混合でも同じことだ。僕らはまだ若い。

特に、早々と経営者という道へ進んだ彼らにとっては、まだまだ年相応でいられるこんな夜が、ことさらに必要なのかもしれない。

新しく出た車のこととか、購入を検討しているマンションのこととか。僕が席につくや否や、竜男との間に咲きかけた話の蕾は、沙和子によって速やかにむしり取られた。

「ちよつと、そんな話は後でいいじゃない。とにかくご飯！肉！」

「はしたないなあ、沙和子は。」

「なにをー？」

学生のノリそのままで掛け合いをする、僕と沙和子。苦笑顔でそれを見ていた竜男だが、やがてわかったわかったというふうに表示すと、振り返って店長を呼び寄せた。

「じゃあ三人揃ったから、持ってきて。」

「かしこまりました。」

僕はちよつと意外に思っ、て、竜男に訊ねた。

「あれ、ここで食べるの？VIPルームとかじゃなく？」

「ああ。今回はね。」

「へえ、普通のお客さんに混じって、普通のお客さんじゃ食べられないようなモノをコッソリと食べるわけね。楽しそう。」

「だろ？」

沙和子と竜男は、うきうきとした笑顔を交わしている。だけど僕は、少し気が引けた。

「うーん、大丈夫かなあ。」

「問題ないない。もうスライスしてあるから、元々が何の肉かなんて絶対分らないし。」

「冒険はね。しなきゃ駄目よ？たまには冒険して感動しないと、私は仕事ができなくなるの。」

口々に言われているうちに、僕は自分こそが一番さもしいことを考えていたのだと気がついた。人目をはばかることなく、興奮と熱狂のおもむくままに聖餐を貪る快楽。それに誰よりも耽溺しているの

は、僕だったようだ。

「なるほどね。」

僕の言に、二人は頷いた。竜男も沙和子も、抑えきれない笑みを浮かべている。その表情はまるで、大それた悪戯を敢行しようとしている子供のようでもあり、はたまた爛れた愛欲的行為を前に高ぶっている不倫カツプルのようでもあった。

きつと僕も同じような顔をしているんだろつな。そう考えると、尚更笑いがこみ上げてくる。そのとき「失礼いたします」と言って銀の盆を手にしたウェイターが来なかつたら、たぶん三人とも吹き出してしまっていたに違いない。

「食前酒でございます。」

ウェイターがそう言つてテーブルに置いた瓶には、ラベルや刻印の類は一切施されていなかった。中身はどことなくとりとしていそうな印象で、白ワインとウイスキーの中間のような色合いをしている。薄い琥珀色。もしくは黄金色と言うべきか。

「これって……。」

我知らず、口をついて出たといったように僕は呟いていた。それを自身への問いかけであると受け取つたウェイターは、明らかに狼狽し、口ごもつた。

「えー、こちらは……。」

「ああ、大丈夫。給仕は俺がするから。」

「あ、はい。恐れ入ります。」

オーナーである竜男の申し出に嬉々として従つと、ウェイターは一礼して立ち去つた。

「これ、蜂蜜酒ね。」

沙和子が言う。それは思わず漏れた熱い吐息が、偶然ある言葉を形成したものであるかのように聞こえた。

「本物か？」

「本物さ。蜂蜜も酵母も、“向こう”のものだ。」

竜男はゆっくりと頷くと、そう請け合つた。

桜色、黄土色、黒紫色。それぞれの部位で分けられた肉の皿がいくつも並び、黄金色の酒が満たされて、宴の準備は整った。

「さあ、今日は何に乾杯しようか。」

竜男が言うと、

「私たちの糧、愛しい民草に。」

と、沙和子が芝居がかった台詞を吐いた。

「何やら意味深ですなえ沙和子さん。」

僕がそう言ってからかっても、彼女は顔色ひとつ変えはしない。

「言葉通りよ。“私のお洋服を買ってくれてありがとうー！”って  
いう、そういう意味。」

「ハイハイ。」

「ああ、そうだ。」

その時ふいに竜男が僕に向き直ったので、話の腰は綺麗に折れた。

「お前の昇進に、まずは乾杯だろう。課長になったんだよな、おめでと。」

「あつそうだった。おめでと。」

僕のために、思いがけず二つのグラスが掲げられる。照れるなどというのは無理だった。

「ありがとう。」

それだけ応えると、いい年をしてはにかんだ口元を隠すように、僕ははやや性急にグラスを運んだ。

初めて口にした蜂蜜酒は、あえて室温のままに保たれていた。口当たりは意外にさっぱりとしていて、程よく狙いすまされた甘みと酸味が口腔内にあまねく行き渡る。その飲みやすさは白ワインに近いとも思えたが、鼻に抜ける芳香は、熟成に費やされた永き星霜を雄弁に語っている。思わず僕は、CMの演出みたいな仕草で、手にしたグラスに視線を走らせていた。

そして、はあつ、という溜め息が三つ。しばらくの間、僕らの感想はそれのみだった。

「すつ……ごく。」

何事にも物怖じしない沙和子の感嘆でさえ、途中で途切れた。その圧倒される感覚には、僕も十分な共感を覚えた。

「こんな代物が、酒税法を適用すれば雑酒に分類されちゃうわけか。まさに冒涇だな。」

「これが伊勢丹や紀ノ国屋の棚に並ぶようなことは、有り得ないけどね。真正なるミードは、紛う事なき祝物だ。」

僕が言い、竜男が応じる。そしてまた、ひとしきりの嘆息。感動にはきりがなかった。

「さあ、では頂こうか。せっかくのご馳走だ。二人ともなるべく、お上品に頼むよ。」

竜男のその言葉でネジを巻かれたようにして、僕はようやく箸に手を伸ばした。すると、

「ちよつと待つて。」

と沙和子が制する。そして彼女は、自分のまつげを凝視するような目つきをして沈黙した。

すると数秒の後、僕らのテーブルを円く囲むようにして、薄い霧状の膜が一瞬立ち現れた。もっともそれは、僕ら三人以外には決して認識できない、魔術の産物であった。常人にはその膜自体も、その表面に怪しく揺らめいていたシンボルや文字も、けして目にすることはできなかつたはずだ。

「驚いたな、詠唱も無しで“半隔離”とは。」

そう言うて目を丸くする竜男の様子も、僕にとってはいささかの驚異だった。彼ほど安定した感情の持ち主は、他には存在しないと無理なく確信できるほどに、平時の竜男は揺れたりぶれたりを見せない男であるからだ。

しかし沙和子の施式には、それだけの価値があった。“半隔離”の呪法は、姿や気配を完全に隠し去る“隔離”よりも高度なものだ。

周囲から見て、ここに術者自身が存在するということが自体は認識されつつも、関心を持つたり何らかの関与をしたりといった行為は、内的力動への干渉により起こさせないという向精神魔術。それを詠唱も印も無しに成し遂げることなど、可能だとは思ってもいなかった。

「蜂蜜酒を触媒にしたのか？」

僕が訊ねると、沙和子は自分でも驚いたといった顔でこくと首肯した。

「でも、それだけじゃないみたい。蜂蜜酒が靈感を高めるって話、あれってやっぱり本当だったのね。」

彼女の言葉を確かめるように、僕と竜男は自らの内面にしばし意識を投じた。

隣のテーブルで笑っている家族の、中学生になる次女が先週手首を切っていること。この店の裏路地の側溝に、いま現在最も世間を騒がせている通り魔事件で使用されたジャックナイフが棄てられていること。二つ隣のビルの一室にこびりついている、かつてそこで行われた術式の残滓。

そういった様々な、そして膨大な情報に、僕は易々とアクセスすることができた。ただ深く集中するだけで、目に見える現実に穴を穿ち、隠された記憶の地下水脈に井戸を通す。それ程の霊力が、たった一口のミードによってもたらされるとは。

いや。恐らく量的なことはあまり重要ではないのだろう。僕はそう思い直した。

本来ならば交わることのない両者が出会うとき、“世界”はそれに辻褃を合わせるべく動く。僕らはそれによってもたらされる恩恵について、誰よりもよく知っている。

そう。五年前のあの日、“彼”との出会いを境にして、人生を、そして存在の在り方さえをも塗り替えられた、僕らは。

ふふっ。笑う声がして、僕の物思いは途切れた。見ると、笑っているのは沙和子だった。

「面白いこと、考えちゃった。」  
そう言って、沙和子は笑う。光の加減か、彼女の目には白目が見当たらなかった。彼女の双眸は真っ暗な二つの洞穴と化しているかのように、そのときの僕には見えていた。

竜男の店は天井が高い。テーブルとテーブルの間隔も、ゆつたりと広めに取られている。ところどころに置かれたキャビネットやチェストは、それが紙ナプキンや用箋挟みの収納に供されているという事実が冒流的に思えるほどに、仕立てのよいアンティークだ。

以前竜男は、「この中に一棹だけ、本物のチップペンデルを紛れ込ませてあるんだ」と言ったことがある。僕は、彼のその言葉がジヨークであることを、長い間見抜くことができなかった。

が、どれだけ贅を尽くし意匠を凝らしたところで、焼肉店というカテゴリー自体が持つ大衆性は払拭できない。それは経営者である竜男自身も了承済みの事実だ。

金曜の夜ということもあり、テーブルはすべて埋まっている。下卑た笑い声や乾杯の音頭、粗野な話し声、食器と食器が触れ合う音、はしゃいだ歓声などが店内に満ちている。しんと静まり返っているテーブルなんて、一卓しかない。賑やかな店内から缺で切り取られたように、静穏を保ち続ける奇妙な客。それは僕らだ。

「面白いこと、考えちゃった」

数分前に、沙和子は言った。

「どんな？」

僕が問いかけると沙和子は、まるで日なたの猫みたいに笑った。寸前までの、暗い衝動に目鼻を付けたような、粘りのある表情は一瞬でしまい込まれていた。

沙和子は手近にあったスープ皿を取ると、ちよつと貰うねと断った上で、蜂蜜酒を注いだ。量は、缶コーヒー一本ぶんくらいか。

「ふふっ」

今から手品をしますとでも言い出しそうな、嬉々とした笑顔を見せながら、沙和子はバッグから何かを取り出した。桐製と思わしき、長細い箱だった。

「あれか」

竜男が苦笑を浮かべた。沙和子はそれへ、上目遣いの目線で応じる。

「知ってるのか？」

僕が竜男に尋ねると、「蛇頭人の指だよ」と、手短に彼は答えた。振り返ってみると、桐箱の中身は既に沙和子の手の中へ収まっていた。全体の構造としては、オーケストラで使われる指揮棒によく似ている。全長は三十センチにやや満たないくらいで、十センチほどの黒い持ち手が付いている。

だがその先端部は、色こそ白いが普通のタクトよりも二回り以上太く、そして節くれだっている。指の骨と言われれば納得のいく造形ではあるが、長さが異常だ。生前の持ち主は少なくとも二十センチ弱もの長大な指を持っていたことになる。

沙和子は物言いたげな僕に対し、「貰ったのよ？」とさほど熱心でもない弁解をした。

「誰に」と問うと、「蛇頭人によ」と臆面もなく返す。

「単なる取り引きの結果よ。指一本と命なら、どっちを選ぶか分かるでしょう？人間以外でも同じよ」

沙和子はあくまで平然と説く。僕の顔にも、いつしか竜男と同じ苦笑が浮かんでいた。

「気をつけたほうがいいよ、お前」

「ああ。恐るべき婚約者だ」

僕と竜男は、そう言っただけで顔を見合わせた。だが当の沙和子は僕らの内緒話などどこ吹く風で、手にしたタクトを眼前にかざした。数瞬動きを止め考えたのち、くるりと先端で輪を描く。チョークで黒板に円を描くように。

すると、その軌跡は目に見える金色の曲線となり、空中にそのまま残った。沙和子はタクトを繰り、テーブル上に浮いたその円内に、ミミズののたくるような線を何本も書き足してゆく。そのひと撫でひと撫でもまた、ぼんやりと光る金色の線となりその場に留まる。

やがて、シンプルな構成でありながらひどく異質な生き物の姿をかたどったような、見ていると人間という地球産の種としての深い戦慄を呼び覚まさずにはおかないような、『蕃神』すなわち外なる世界の神を表す魔術の意匠が完成した。

沙和子は慎重にその出来映えを検分し、ややあつて頷くと、シンボルの下端にタクトの先端を当て、すいと直下へ一本の線を引き下ろした。すると蕃神の意匠はまばゆい輝きを放ち始め、つるつるとした動きで流れ落ち、沙和子が最後に引いたラインへと合流すると真下に置かれたスープ皿の中へと吸い込まれ、消えた。

スープ皿の中には、浅く注がれた蜂蜜酒がある。蕃神の印を飲み込んだそれは、人間の目では黄色とも緑とも青ともつかない色で輝き始め、さらには表面からゆらゆらと同色の炎のような霊気を立ち上らせた。

「なあ、教えてくれよ」

タクトを持ち直し、儀式の続きを行おうとしている沙和子に僕は尋ねた。くるくるとした目の輝きで、彼女は僕を見返した。

「何をしようとしてるのかさ」

僕の問いに、沙和子は無邪気に笑った。その一点の曇りもない笑みに、下方からの光が凄みを与えた。

「ふしぎな薬を作ります」くすくすと、含み笑いで彼女は答えた。

「死者蘇生薬を、少々」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0251h/>

---

同窓会

2010年10月14日16時28分発行